無聖

第70号

◆「他は是他にあらず」
　会長　天野　大真 ……2
◆第20回チャリティバザー報告 ……3
◆平成26年度第2回研修会報告 ……4
◆平成26年度会員大会報告 ……4
◆台湾移動研修旅行報告 ……5
◆傾聴行茶活動報告 ……6
◆第23期 委員会・事務局総括 ……7
◆東日本大震災 被災地慰霊行脚・法要
　並びに「亡き人への手紙」お焚き上げ供養報告 …8
◆東日本大震災 ～あの日から～
　「被災三県代表者座談会」 ……9
◆サンタピアップみやぎ活動報告 ……15
◆年次総会・事務局だより ……16

会長挨拶

他は是他にあらず

第23期会長　皆傳寺　副住職
天野　大真

この度今期最後の巻頭の挨拶を述べさせて頂くにあたり、先ず以てこの二年間様々な形で当会の活動を支えて下さいました県内御寺院様、諸老師諸先輩方に心から感謝申し上げます。そして、第二十三期宮曹青の活動にご協力頂きました会員諸兄、そして山内のご家族様に衷心より厚く御礼申し上げます。

振り返れば今年度の宮曹青は大遠忌の前年という難値難遇の勝縁に恵まれ、予修法要や研修会などを通し、自らの根幹を見つめる機会を数多く頂戴することが出来ました。昨年十一月には、永光寺第五百十七世住職　屋敷智乗老師をお迎えし、僧侶としての自己を、永光寺という曹洞宗の精神的支柱ともいうべき歴史的観点から深く参究させて頂くことが出来ました。

また、二年に一度の移動研修に於きましては、二月の八日から三泊四日の日程で台湾での現地研修を行い、両本山別院東和禅寺での拝登諷経や台湾最大の仏教系ボランティア団体である慈済基金会見学など、単純な観光を超えた、未来へつながる知識と経験を得る貴重な体験をさせて頂きました。特に花蓮市の慈済基金会に於きましては、一人の出家者から始まった利他行の実践が、宗教や政治を超え貧困や災害で苦しんでいる世界中の人へ救済の輪が広がっていった過程に、心が震えるような感動を覚えました。先の震災に於いて慈済会のボランティアの方たちが生々しい津波の爪痕を物ともせず大挙して被災地に入り、被災者の援助に昼夜を問わず奔走された事は皆様の記憶に新しいとは思いますが、今回の本部への訪問は、率直に感謝の気持ちを伝えることが出来たと同時に、僧侶としての生き方の根本を自らに問いかける又とない機会となりました。

復興支援活動では、昨年度に引き続き《仏一息（ほっとひといき）》の活動を今年度は計五回十三カ所の仮設住宅で行いました。各地で空室が増え、入居者も徐々に少なくなって行くなか、顔見知りとなった入居者の方々との語らいのひとときは、自分自身を見つめ、そして僧侶として活動出来る有り難さを感じる大切な時間でもありました。

十月に開催されましたカンボジア教育支援チャリティバザーでは、第二十回を記念するに相応しい、演劇や展示物、そして豚汁などの無料提供など、新しい企画を多数盛り込んだ大変内容の濃い、これまでに無い斬新なバザーとなりました。これらの企画を陰に陽に支え大成功に導いて下さいました九教区の御寺院様、そして寺族会様、青年会の皆様と、バザーの品物を提供頂きました県内の御寺院様にこの場をお借りして心から御礼申しあげます。

今期宮曹青の大きな前進の一つに、インターネットでの迅速な情報の発信があげられます。広報編集委員会では、青年会の全ての行事に委員を派遣し、生き生きとした写真とともに詳細な報告を青年会のホームページに素早く掲載致しました。このことが会員各々の理解を深め、各行事への参加者増加の一助となった事は紛れもない事実であり、今後もさらなる発展を期待致します。

一月に開催されました恒例の会員大会は、時準雄第十四期会長以来、特別会員制度二十年の節目の年の開催となりました。講演会とボーリング、そして懇親会を通しての青年僧侶と様々な業種の方の交流は、地域をこえ、年代を超え、たいへんな盛会のうちに終えることが出来ました。企画運営を担当した交流事業委員会の周到な準備と抜群のチームワークは今期の円滑な事業運営の大きな原動力となりました。

震災から四年となる三月十一日には、全国曹洞宗青年会と共催し、十二教区青年会のご協力のもと大川小学校周辺の慰霊行脚を修行させて頂きました。凄まじい強風に押し戻されそうになりながらも、全国から参集した青年僧侶と心を一つにして、大川小学校へ向けおよそ五㎞の行程を一歩一歩、歩みを進めます。途中《亡き人への手紙》を皆で読経しお焚き上げ致しました。灰になったハガキが、長面浦を吹く風に乗って遠く空高く運ばれる様子を見ながら、手紙を下さった皆様の思いが届くことを唯々願いつつ一同で手を合わせました。

サンタピアップみやぎボランティア会につきましては、カレンダーの制作販売など新しい企画に挑戦し、多くの方のご協力のもと大きな収益をあげることが出来ました。カンボジア教育支援という一つの目標に向かって、様々なアイデアを投入し工夫を重ねていくサンタピアップの伝統がこれからも続いて行くことを切に願っています。

最後に今期の自分自身を振り返ってみれば、至らぬ点や配慮が足りないところばかりでありましたが、全て諸先輩方、役員諸師、会員の皆様に支えて頂きました。特に伊達吉信事務局長を始めとする事務方の皆様には大変なご苦労をおかけしました。そして今期事務局を置かせて頂きました宮曹青第十代会長であり、大先輩でもあります仙台市福聚院ご住職伊達廣三老師には多大なご協力を頂き心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

結びにあたり、当会の更なる発展と、会員の皆様のご健勝を祈念致しますとともに、今後も宮曹青に対しまして変わらぬご理解ご協力をお願い申し上げます。

合掌

カンボジア教育支援　第二十回チャリティバザー報告書

去る十月八日、今回、第二十回の節目をむかえるチャリティーバザーが、会場教区の第九教区の御寺院様、教区青年会様、寺族会様、そして地元企業様のご協力のもと、三本木総合体育館を会場に開催されました。

また、バザー物品は四千点以上ものご提供があり県内寺院様に改めて感謝申し上げる次第です。

今回のバザーでは、地元教区寺院様を中心にチラシを配布、掲載させて頂くとともに、新聞折り込みチラシを多数入れて宣伝頂きましたおかげで、当日は六百人を超える来場者が三十分ほどで入場し、全ての商品を購入して頂くことが出来ました。記念イベントとしてオープニングセレモニーで行った演劇による趣旨内容の説明や、設置した外ブースでの来場者へのお茶出し、いも煮等の提供も大変好評で喜んで頂きました。

更に、東日本大震災で被災された方々に対する支援として石巻「ザッフーの会」様、養育支援が必要な県の子ども達を支援する「みやぎ子ども養育支援の会」様、震災による孤児を支援する「ＪＥＴＯみやぎ」様の各活動を紹介するブースを設けたほか、地元活動団体の応援を兼ねて身体障がい者支援団体「大崎誠心会」様のブースも設置し、地元生産品の紹介、販売も行いました。

カンボジアのさらなる発展、また宮城県をはじめ被災各県の復興を願って、今後とも是非この活動をご理解頂き、ご協力、ご支援の継続を頂きたいと思います。

（ボランティア委員長　小枝　誠智）

開催日時	平成26年10月８日（水）午後12時30分　オープニングイベント開始 午後１時00分（販売開始）～午後２時30分（販売終了）
開催会場	「大崎市三本木総合体育館」（会場教区：第９教区）
参加者	188名（前日準備含む） ・10月7日（準備会）合計91名 ○内訳：宮曹青会員74名　会場・第９教区（御寺院・寺族会）13名　協力企業４名 ・10月8日（当　日）合計97名 ○内訳：宮曹青会員67名　会場・第９教区（御寺院・寺族会）13名　協力企業３名 他14名
来場者総数	620名
販売商品数	4,450点
総売り上げ	1,004,917円
売上金額	943,000円　※売上金は、全額サンタピアップみやぎボランティア会へ寄付
会場募金	42,317円　※募金は、全額サンタピアップみやぎボランティア会へ寄付
エコバック売上	19,600円　※売上金は、全額サンタピアップみやぎボランティア会へ寄付

平成26年度第2回 研修会報告

期日：平成26年11月14日（金）
会場：第二教区　林香院

「永光寺とその門派」

講　師：屋敷　智乗　老師
（石川県　洞谷山永光寺第五一七世住職）

峨山禅師六五〇回大遠忌を来年に迎え、瑩峨御両尊のご遺徳を今一度学び直したく石川県羽咋市永光寺住職、屋敷智乗老師を講師にお招きし研修会を開催しました。会員、賛助会員三十五名の出席の中、屋敷老師は瑩山禅師が元応元年（一三一九）に、永光寺を教団の中心とすべく門弟に示した「尽未来際置文」の文中にある「一味同心」の言葉を説明なされてから、永光寺のお話を始められました。老師の話される内容は、地元羽咋に残る伝承や永光寺に現存する多くの資料を元にした深い考察が感じられ、五老峰や永光寺門流の説明はもとより、永光寺と石動山の五社権現（修験道山伏）との繋がりや、三日坊主という言葉が永光寺の輪住制度から生まれた説があることや、永光寺本尊の説明から瑩峨御両尊がどのような時代背景で永光寺を建立されたのか、宗門最初の尼僧堂と言われる永光寺塔頭であった「円通院」の本尊十一面観音像と瑩山禅師祖母の明智優婆夷と母懐観優婆夷との関係など、多くの内容を講義いただきました。質疑応答にも快く応じていただき、終始和やかな雰囲気の中、会場全体が「一味同心」となりながら、楽しく学ぶことが出来ましたことご報告申し上げます。

研修委員長　神作　紹道

平成26年度 会員大会報告

平成二十七年一月二十九日仙台市ホテルグランテラスにて「平成二十六年度会員大会」が開催されました。第一部の研修会では、正会員はもちろんのこと特別会員や企業様方にも役に立つ研修内容を企画したいと考え、講師にフリーアナウンサーの上野泰夫氏をお招きし社会人としてのマナー講座を含めた研修会として、言葉の使い方や手紙マナー等をユーモアも取り入れながらお話し下さいました。「会話はキャッチボールである。真摯に話せば、相手も真摯に受け止め会話を返してくる。会話は生きている。」とお話し下さいました。会話術を学ばせて頂くとともに、一社会人としての常識や傾聴ボランティア活動を行うにあたって大変参考になる講演となりました。我々青年僧が学ぶべき課題を示して下さったと思います（六十八名参加）。

講師の上野 泰夫 氏

第二部のボウリング大会（七十二名参加）、第三部の懇親会（八十四名参加）では今年度もたくさんの会員に参加頂き盛会裏に終えることが出来ました。

ボランティア委員長　小枝　誠智
交流事業委員長　永松　泰樹

台湾移動研修旅行報告

平成二十七年二月八日から十一日の三泊四日の日程で、台湾移動研修が行われました。宮城県曹洞宗青年会では道元禅師七五〇回大遠忌記念事業のハワイ研修以来十五年ぶりの海外研修となりました。なお参加者は正会員、賛助会員あわせて二十二名となりました。

八日は移動のみの行程で、台北の入国手続の後、バスにて夕食会場へ。研修旅行での無事を祈念ながら台湾料理をいただきました。連泊にてお世話になる台北国賓大飯店には夜十時頃到着しました。

九日は、始めにバスにて東和禅寺へ拝登しました。明治期に建てられ、現存している山門兼鐘楼堂をくぐり、本堂にて拝登諷経、観音堂にてお茶、菓子を頂き乍ら、知客和尚様に建物の歴史や、僧侶の生活などのお話を伺い、その後、寺院堂内を案内していただきました。食堂には五観堂、五観の偈と書かれた額が掲げられ、本堂正面の大高炉や天井、柱等には永平寺・総持寺の両山紋が入っており日本曹洞宗別院としての名残が今でも残っていました。

東和禅寺は曹洞宗大本山台湾別院として一九一〇年（明治二十八年）に立派な七堂伽藍で創建され、初代住職は宮城県仙台市昌傳庵　大石堅堂老師で、戦後まで日本曹洞宗の僧侶が歴任されていました。後に観音堂が建立され、一九四五年観音堂は台湾にて接収、東和禅寺と改称されました。今は八人の僧侶が修行されていて二百軒の信徒さんの供養なども されているとのことです。

東和禅寺の拝登の後、龍山寺を参拝しました。旧暦の正月が近いため、色鮮やかな黄色い提灯が壁を連ねとても華やかな印象でした。境内では一般の方々の祈りの場所が各所にあり、お線香をあげ、五体投地し祈りをする中国・台湾の方々も見受けられました。

龍山寺

午後には、台湾故宮博物館にて、中国三千年の歴史の中で作られた銅器・翡翠彫刻・青磁器・白磁器・書画など、所蔵物の一部を見ることが出来ました。書に興味のある私は三十分程の休憩時に早足で書画部に行き、王羲之の十七帖拓本をはじめ、趙孟頫、米芾、董其昌などの肉筆を目の当たりにできたのは、感慨深く非常に貴重な体験でした。

台湾故宮博物院を後にし、忠烈祠に向かいました。忠烈祠では革命・建国で命を落とした人や日中戦争などにおいて戦没した英霊を祀る祠を参拝し、門と霊廟まで百メートルはあろう忠烈祠の通路にはロボットのような規則正しい進退で兵隊さんが歩く衛兵交代のセレモニーを見ることができました。

十日は、特急列車で台北から花蓮に向かい、慈済会（正式名称　財団法人 中華民国 仏教慈済慈善事業基金会）を訪問しました。広大な土地に静思堂（約二千人収容できる大講堂）、慈済病院、慈済医学院、慈済看護婦学校等が有り、その大きさに圧倒されました。静思堂入口からは慈済会新宿支部に以前まで在任されていた林さんの案内で慈済会創立までの生い立ちや慈済会の活動ＤＶＤを視聴した後、パネル写真の並ぶ災害救助現場での活動風景を詳しく聞くことが出来ました。パネルの一ブースでは東日本大震災の際、石巻等で、六回にわたり災害見舞金を被害者に直々に配る様子なども見ることが出来ました。また、慈済会が独自に開発した災害支援物資や、ペットボトルなどでリサイクルし作ったTシャツ

静思堂

静思精舎

の他、ブランケットなども展示され、援助活動の幅広さが窺えました。昼食は、静思堂の裏手にある食堂で精進料理を頂きました。

午後は慈済会の僧侶が修行している静思精舎へ拝登しました。知客和尚（尼僧）様の案内にて、本堂参拝の後、境内の畑、養肥所の様子、栽培方法の説明を受け、僧侶の衣服を裁縫する縫製室等を拝見することが出来ました。

精舎正面で記念撮影を終えて、行きと同じく花蓮より特急列車にて台北へ戻ました。

最終日は午前十時出発の航空機に合わせ、七時にホテルを出発し、日本時間午後三時半頃、日本への入国手続きを終え、参加者全員怪我等無く無事解散いたしました。

三泊四日でのスケジュール・内容共に充実した台湾研修は日本曹洞宗と台湾の関わりや災害支援団体と僧侶の在り方など、改めて多くのことを学ぶことが出来ました。このような台湾研修を実現するにあたり、天野会長、神作研修委員長始め役員の方々、BSトラベルさんのご尽力と宮曹青会員諸氏のご協力、ご理解を頂き、開催できました。誠にありがとうございました。また、この場をお借りして、師寮寺の皆様と、家族に感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

研修副委員長　井上　寛尚

東和禅寺本堂前にて

傾聴行茶活動　仏一息（ほっとひといき）　活動報告

○平成26年11月7日（金）	
国府多賀城駅南地区（城南）応急仮設住宅、山王市営住宅跡地応急仮設 高橋公園応急仮設・多賀城中学校応急仮設 多賀城公園野球場応急仮設住宅	※5か所合計 会員11名参加 住民54名参加
○平成26年11月10日（月）	
南方仮設住宅	※会員17名・住民64名参加
○平成27年3月16日（月）	
仮設町北第三団地	※会員4名・婦人会3名・住民7名参加
仮設役場前団地	※会員6名・住民15名参加
仮設大森団地	※会員7名・婦人会3名・特別会員１名 住民22名参加

住民の方々は今も仮設住宅での生活を強いられ、将来への不安など心配なことが沢山あるかと思いますが、今回の訪問におきましても、皆様の笑顔を拝見することができました。私たちも寄り添う気持ちで接してまいりました。また四月より災害公営住宅に引っ越される住人もおられ、住民同士のお別れ会の趣旨を踏まえたお茶会になった所もございました。住民同士のコミュニケーションの場として傾聴活動を利用していただくことが出来たのではないかと思います。

ボランティア団体の訪問が減る中、我々青年僧の姿をご覧になって安心してくださる方もいらっしゃいました。また各仮設住宅の自治会等が解散し、コミュニティーを維持できない現状も起きていますが、何とか工夫を重ねて傾聴行茶「仏一息」の活動を続け、これからも仮設住宅に足を運んでいかなければならないと思います。まずは、今期二年間のご協力、ご理解に対しまして深く感謝申し上げます。以上報告とさせて頂きます。

ボランティア委員長　小枝　誠智

委員会総括 ～第23期を振り返って～

研修委員会

委員長　神作　紹道

委員長就任にあたり天野大真会長から「他は是れ吾にあらず」のスローガンに委員長副委員長の想い、委員会の想いを重ねて自由に委員会を進めて下さいと仰っていただいたのを覚えております。第二十二期研修委員長、錦織誠道師から役を引き継ぎ、重圧と不安を感じていた私の背中を心地よく押していただきましたこと深く感謝いたしております。平成二十五年度は東日本大震災から2年が経った時期に宮曹青がどんな活動をしていけるか模索し、平成二十六年度は峨山韶碩禅師六五〇回大遠忌、また戦後七十年を迎える年度であり、第二十三期は多角的に活動していかなくてはならない期でありました。主な活動は以下参照いただきますが、やはり「何れの時をか待たん」の句が第二十三期の研修委員会の想いであったと感じています。最後に会長、副会長、監事、諸役会員の皆様、そして研修委員会の皆様に感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

ボランティア委員会

委員長　小枝　誠智

総括として、傾聴行茶活動は二年間継続しながら顔を出させていただけたおかげで、仮設住人の方と徐々にではありますが親睦を深めることが出来ました。しかし新たに災害復興公営住宅に移って行かれる方もおられ、仮設住宅は閉散としています。震災から四年が経ちましたが、仮設住宅へのボランティア団体の訪問が極端に減ってしまったという声を耳にし、住人は取り残されてしまっているという焦燥感をお持ちの様です。今後の支援の在り方を検討しなければならないと思います。

また、そのような県内において、十九回、そして二十回目の記念となるカンボジア教育支援「チャリティバザー」を開催させて頂きました。多くの来場者にお越し頂いた中で、被災されている県内の御寺院様から沢山の物品のご提供を頂き、盛会裏に円成出来ました。

『サンタピアップみやぎボランティア会』も二十周年を迎え、カレンダー事業など新しい事にも取り組んでまいりました。会員大会研修会をはじめ、サンタピアップみやぎボランティア会総会などにおいて、あらためて宮曹青の足跡をたどり、ボランティアの意味を考える機会を作ることが出来ました。

ボランティア活動は宮曹青の根幹をなすものであります。この蓄積された経験を時期執行部へ受け渡し、当会事業が世の中にとっても、我々にとっても大きな存在となるよう願ってまいりたいと思います。

最後にボランティア委員会の活動目的として、社会の現状に即して何をするべきか、僧侶として果たすべき役割とは何かという今期の活動趣旨を常に念頭において企画をしてまいった次第ですが、至らない点は多々あっただろうと思います。御尽力頂きました役員、理事、委員諸師、会員諸師の皆様に心から感謝を申し上げて委員会総括と致します。

広報編集委員会

委員長　清水　大伸

会報誌「無聖」の発行、ホームページを運営し会員のみならず一般の人にも広く我々の活動を知ってもらえるよう広報活動を行い、また「亡き人への手紙」事業の広報担当も行って参りました。

今期発行した無聖に関しましては独自企画として東日本大震災に関連した記事を盛り込み、県内でも生じてきている震災復興の関心の低下、風化防止の一助となるよう企画しました。特に七十号で企画しました「被災三県代表者座談会」では、震災から四年を迎える今こそ、これまでの復興支援活動を振り返る一つの区切りとして企画し、今後の有事の際におけるボランティア活動の教訓、記録として記事に致しました。

ホームページ運営では天野会長より「ホームページは会の顔である」とご教授頂き、「顔」として恥じないよう運営してきた所存です。現ホームページではデザイン、内容まだまだ不十分のところもありますが、今後の方向性を示すことが出来ました。

今期、広報編集に携わることで活動を記録することの重要性と、我々の活動を広く知ってもらうことが布教に繋がるということを実感しました。無聖、ホームページの更なる充実を次期に期待し引き継ぎ致します。

最後になりますが、快く取材に応じて頂いたご寺院さま、先輩方、広報編集に携わって頂いた関係各位、委員の皆様に感謝申し上げ総括と致します。

交流事業委員会

委員長　永松　泰樹

皆様からのご協力を頂き、2年間の任期でございましたが、無事に勤める事ができました。誠に有り難うございました。また、この間たくさんの有難いご縁を頂き多くの事を学ばせて頂きました。心より感謝申し上げます。本当に有り難うございました。

事務局

事務局長　伊達　吉信

事務局長を拝命してから二年の任期を終える事となりました。二年という月日は長い様でとても短いものでした。

当初私は青年会に入会して二年しか経たないのにはたして事務局長という大役を自分に務める事が出来るか大変不安でしたが、天野会長始め役員皆様のご指導のもと無事円滑に務めさせていただく事が出来ました。

また今期は新しい事業で傾聴活動「仏（ほっと）一息（ひといき）」を行いました。仮設住宅にお住まいの方に耳を傾け寄り添うことは、はじめて訪問させていただいた私にはとても難しく最初は住民の方と距離があり苦労しましたが、訪問回数を重ねること徐々にではありますが距離が縮まり打ち解けていき話せるようになりました。現在は仮設を出られて災害公営住宅等に移られる方が増えてきて、ボランティア団体の方の訪問回数が減ってきている事を耳にします。これからもっともっと宮曹青も色々な形でサポートしていかなければと思います。

二十六年度には震災以来休止していましたソフトボール大会を開催させていただきました。当日は、開催を心待ちにされていた会員の方をはじめ、過去最多の三一八名の方に参加頂き事務局としては安心しました。

顧みるともっと色々な事が出来たのではと反省ばかりが残りますが、事務局長の任にあたり多くのことを学ばせていただき、県内外の多くの方とお会いでき、これからの僧侶人生大きな財産を得させてもらいました。

二十三期の経験が今後の宮曹青の活動に繋がっていく事を願い、私も微力ながら尽力させていただきます。

最後になりますが事務局長として二年間支えて下さいました執行部の皆様方、ご協力いただきました会員の皆様に篤く御礼を申し上げます。

合掌

東日本大震災被災地慰霊行脚
並びに大川小学校追悼法要・
『亡き人への手紙』お焚き上げ供養報告

平成二十七年三月十一日（水）東日本大震災被災地慰霊行脚（全曹青・宮曹青共催）並びに大川小学校追悼法要（遺族会主催法要随喜）を修行しました。

当日は石巻市海蔵庵様別院様に集合し全曹青からお声掛け頂き全国からご随喜頂いた二十二名の曹青会員と宮曹青からの三十二名が強風吹きすさぶ中、大川、雄勝、北上の三つのコースに分けて、途中、地元御寺院様や慰霊碑の前でご供養しながら行脚致しました。

大川コースの途中長面浦の海岸にて皆様からお寄せ頂きました『亡き人への手紙』をお焚き上げ供養させて頂きました。一同で読経しお焚き上げ供養された手紙の灰は風とともに空に舞っていきました。

行脚を終え大川小学校遺族会主催の慰霊法要に随喜し、十四時四十六分に黙祷の後、法要を修行しました。

遺族会会長のお言葉の中で震災から四年を迎えても遺族の悲しみは今もあの頃のままと仰っておられました。

東日本大震災から四年。行脚に参加した一人一人がそれぞれの胸の中であの日からを振り返り、亡き人へせめてもの想いでご供養致しました。

亡き人への手紙 お焚き上げ供養

大川小学校慰霊法要

東日本大震災～あの日から～

岩手・福島・宮城　被災三県代表者座談会

「復興支援活動を振り返る」

日時：平成二十七年二月十七日
場所：仙台市　林香院

座談会出席者
岩手：惠津森哲夫師・石ヶ森桂山師
福島：光英覚法師・瀧澤勝俊師
宮城：門脇昌文師・奥野秀典師
座長：天野大真

天野：本日は大変お忙しいところわざわざ仙台までお越し頂き誠に有り難うございます。この度皆様にお声がけさせて頂いたのは、まもなく丸四年になろうとする東日本大震災に関して、震災当時から現在までの活動について忌憚なくお話頂き、また今後も高い確率で起こるといわれる災害に備え、有事の活動に際し教訓、指針となるよう記録させて頂く為であります。皆様には事前にアンケートをご記入頂きましたが、それぞれの地域ならではの状況とともに、その地域だからこそ出来た支援のあり方もあったのではないかと思います。本日は当時の苦労話や、失敗談を含めて是非たくさんのエピソードと、教訓をお聞かせ頂ければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

まずは平成二十三年三月十一日にさかのぼります。震災直後、青年会として最初に何を行いましたか。時期などもお知らせ頂ければ幸いです。岩手からお願いします。

惠津森：当初は命令系統がなく青年会の活動ということではなくそれぞれがご縁の所に炊き出しや支援に動いていた状況でした。個々が活動しているのでどこでだれがどんな活動をしているのか分からない状況が二週間程続きました。一番大変だったのは燃料が足りなったということですが、幸い酪農家の方がタンクで軽油をお持ちになっていたのでそれを頂いて現地に向かった方もいたようです。

私は震災時岩手にはおらず九州におりました。何とか戻ってきて三日後に岩泉町や田老に活動に行きました。私は消防団員でもあるのでヘルメットや半纏を着用していたので立ち入り制限の所にも入っていくことが出来ました。ですがこの個々で活動している状況をみて地元の教区がひとつになって活動しなければならないと感じ、初めに瓦礫の撤去、火葬場での読経を行い、徐々に岩手県曹青として活動が広がっていきました。当時事務局は大槌の高橋英悟師が担っていましたが、被災し避難所となっていたので県曹青事務局としては機能が難しく、代わりに奥州市の事務局次長渡辺師が担いましたが、すべてが彼の所に集中してしまいどう捌いたら良いかというのが本音だったのではないでしょうか。また宗務所、教区長様、周りのお寺様を気にしながらの活動だったので機動力を活かしてとは行かなかった。ただ、自分たちの気持ちを行動に示さなければならないという思いが瓦礫の撤去、火葬場での読経に繋がったのではないでしょうか。

天野：やはり個々の活動が徐々に県曹青の活動に繋がったということですね。石ヶ森師のご自坊は岩手の山田地区ですが状況はどうでしたか。

石ケ森：私は震災の時、寺を留守にしていて翌日に帰りましたが、ご遺体が次々運ばれてきて、着の身着のままとにかく供養しました。消防の人達は自身も被災者なのですが、食事をする暇もなく捜索活動をされてましたので食事を提供し寺で休んでもらいました。食事を共にすることで色々と情報が得ることができました。携帯が使えない状況でしたが、電波が繋がる場所から何とか情報を発信した

ら、同安居が三重から三十八時間かけてトラック一杯の物資を届けてくれました。こちらが必要であろう物資を想像して届けてくれて本当にありがたかったです。その後、各曹青会から物資を頂いたりしましたが、やはりその時必要な物がタイムラグで届く頃には余ってしまうということがありました。これは今後の有事の際、改善すべき問題だと思います。

※左から　石ケ森師、惠津森師

天野：ありがとうございました。次に宮城の当時について時系列にお聞かせ頂きます。

門脇：当時宮曹青としては四国での研修旅行中で最終日の伊丹空港で帰りの飛行機を待っているときに東北の状況を知りました。もちろん飛行機は欠航となったのですが旅行会社のビーエストラベル様の機転でバスを手配して頂き震災翌日の夜に何とか帰ってくることが出来ました。しかし戻ってきても県内の電話は不通で他の役員とも連絡が取れず、当時の会長の私と副会長の奥野師と天野師と今後について話し合いを行いました。正直何をどうすればよいか見当がつかない状況でしたが、まずは物資を届けようと考え、連絡が取れる県内外のお寺様にお声かけし物資を募りました。実際に石巻方面へ届けることが出来たのが震災から一週間後でした。道路が寸断され状況が分からない、そしてやはりガソリンが無いということで行きたくても行けず時間がかかってしまいました。そんな折、当時の全曹青会長の久間師の機転でSVAから緊急車両の指定許可証を二枚交付頂いたので給油等で非常に助かりました。これは、出来れば全国の青年会の会長様や所長様が本庁に車両登録するなどして有事の際すぐに発行出来るようになれば、特に初期活動に於いては有用なことと感じました。その後、被災されたお寺様の墓地や本堂の土砂、瓦礫の片付け作業を行いました。怖かったのが作業中も余震があり、また津波が来るかも知れないということでした。命があってこそボランティアが出来るので、もしもの時は自分の命を最優先し内陸の方へ逃げるようにと参加者に念を押しました。そういった活動を自分の会長の任期中は続け、次の会長である奥野師へ引き継ぎました。

宮曹青　片付けボランティア風景

天野：そうでしたね。当時は門脇会長の任期が三月三十一日でおわり、その後次期会長となる奥野師がリーダーシップを取っていくのですが、期が替わって初めにどのような活動を行いましたか。

奥野：本来なら四月で替わる予定でしたが、実際に総会を開く事ができたのが六月でした。その間も他県曹青会のご協力を頂きながら片付け作業、炊き出し等を続けてきましたが、期が替わって県曹青として何か出来ることはないかと考え、始めたのが月命日供養法要でした。毎月十一日に被災された沿岸部の教区を回りまして供養法要を修行させて頂き、また被災された方とお話しが出来るようにと行茶のスペースを設けました。早い時期ですと参列された被災者の方々が久しぶりに会う再開の場所にもなりました。そのような活動を初年度は続けて参りました。

天野：次は福島の光英さんお願いします。

光英：皆様共通しているのが地元にいらっしゃらない時に震災が起きてますね（笑）。私も全曹青の会議があり東京グランドホテルにおりました。何とか十三日の早朝に自坊のある福島いわきに戻りました。皆さんと違う所はやはり原発事故が大きいです。先ほど命があってこそボランティア活動が出来るとお話がありましたが、福島に於いては果たしてここにいて自分、家族の命は大丈夫なのかという不安がありました。当時の自分の手帳のメモ書きを見ますと「三月十七日、朝が怖い」とあります。時間が経つたびに原発事故の状況が悪化するためそのように示した記憶があります。福島県曹青としては当時会津地方支部が執行部でしたので、そちらで全国からの支援物資、支援を取りまとめました。やはりガソリンが無かったため新潟まで給油しに行ったりと大変だったようです。また当時の全曹青の会長が福島県の久間師でしたので、全曹青からの依頼で物資や炊き出し支援が多かったです。更に瀧澤師が当時の全曹青の事務局次長ということもあり全曹青とのパイプラインとして活躍頂きました。

天野：それでは瀧澤師、続けてお願いします。

瀧澤：私の自坊は原発から約七十キロ地点にあり、やはり「ここにいていいのだろうか。逃げた方が良いのではないか」という葛藤が一カ月程ありました。当時は地元ラジオをよく聴いていて地域の情報が伝えられ有事の際のラジオの偉大さを感じました。当初は放射能で外出できないため全曹青執行部の方々とはメールでのやり取りが続きました。その時に全曹青HPの「般若」で支援物資を募り三月末には全国から一輪車やデッキブラシ、高圧洗浄機などすごい量の物資が福島に集まり、全曹青の力はすごいと感じました。福島曹青会としては当時の高森会長、事務局長が準備に奔走し、頂いた支援物資を活かし相馬女子高校避難所で四日間炊き出し支援を行いました。振り返ると、

つらいこともありましたが気持ち的には充実した時期もあったように思いました。

天野：皆様から震災当初から混乱の中どの様に活動されてきたかお聴きしましたが、ここで支援物資についてお尋ねします。宮城さんでは早い段階で支援物資などの提供依頼を、全曹青等を通じて発信しておりますが、岩手、福島はどうでしょうか？特にこの点に関しては、全国から膨大な量の支援物資が届くという事態になりかねず、それには保管する場所も当然必要になってきますが、そこはどのようにクリアしましたか？

惠津森：岩手曹青では全曹青との繋がりもあまり無く支援物資をどこかに依頼したということはありませんでした。それぞれがご縁の方にお願いし個々の範囲内で工面し集めましたが、すぐに避難所では必要がない、余っている状況になりました。

天野：宮城では保管場所はどうされましたか。

門脇：全曹青から支援物資の提供のお話しがあったとき、その保管を青年会事務局が行うよりも公的な宗務所のほうが広く提供しやすいと判断し宗務所で保管頂くようにお願いしました。

天野：会長が奥野師に代わってからはどう管理されましたか。

奥野：全国の同安居や御寺院様にお声かけして物資を募り送ってもらいましたが、当時は配送業者も個別に届けることが出来ない状況でしたので檀家さんからトラックを借りて宅配センターまで取りに行き、当時の事務局で仕分けをして沿岸部の避難所まで届けました。難しかったのがその時必要な支援物資をお願いして送ってもらうのですが、届ける時にはタイムラグでもう必要なかったり、また別の地区ではまだまだ必要であったりと、その調整が非常に難しかったです。また支援物資を避難所に届ける際も物資リストを作り、数を把握して届けるようにしました。

天野：福島ではどうでしたか。

瀧澤：相馬女子高校で炊き出し活動をした時、体育館に企業からのたくさんの支援物資が山のように積んであり、それをボランティアの方が仕分けをされておりましたが、苦慮されているようにみえました。話は逸れるのですが被災地で活動する青年僧はピンポイントでこれが必要と時期に応じて情報発信する必要があるのではないかと感じました。

天野：これまで震災当初からの初動について聞いて参りましたが次は青年会の活動についてお聞きします。各県、様々な活動されてきたと思いますが特に被災者に喜ばれた支援、あるいはうまくいかなかった支援活動はどのようなものでしたでしょうか。岩手からお願いします。

惠津森：秋田曹青の新川師が頻繁に岩手に通って足湯を提供して頂き大変好評でした。あと建設業を行っている会員がいたので材料を集めトラックに積んでお風呂を作って提供しました。

石ケ森：これは正直うらやましいと思いました。大槌地区までは色々な支援があるのに（地元の）山田地区は交通の便が悪くこういった支援はなかなか出来ませんでした。私は被災者と共に現場にいて感じたのは傾聴活動です。堅苦しく考えず、おっさま（和尚）が話を聞いてくれるというだけでいいんです。明るく振るまっているおばあさんが「おっさまに思いを吐き出す事で癒される」と仰っておられました。顔を知っている和尚が話を聴いてくれるというのが非常に意義のある事だと感じました。時が経つにつれだんだん傾聴はじめボランティア活動が先細りしてきているようですが、少人数でも年に一回でも来て頂くことが被災者の方にとってうれしいと思います。

天野：各曹青会でも傾聴活動を続けてらっしゃいますが、宮城としては僧侶だから出来る活動として月命日供養が最初の活動であったと思います。それはどの様な思いで始められたのでしょうか。

奥野：県の青年会として出来ることをまず考え、被災地域が大変広いため被災地域を転々と回りまして月命日法要を修行させて頂き、法要だけではなく行茶活動もしながら参列された被災者が少しでも気持ちが安らぐようにと始めました。当初は会場を被災教区の御寺院様にお願いしておりましたが被災し大変な状況なところでご迷惑をかけてしまいました。回数を重ねるにつれ、御寺院様のご迷惑にならないようにと葬儀会館を会場にお借りしたりとしました。受け入れて頂く教区も被災状況が様々でしたので、当日を迎えるまで多少の苦労はありました。当初は供養法要だけでしたが、月が進むにつれ供養だけではなく復興の御祈祷をして欲しいといった要望があり、供養と併せて御祈祷もして参りました。また、平行して炊き出しも避難所で行って参りましたが、特別会員の仕出し屋さんのご協力を得ながら衛生面に気を使い行いました。

門脇：浜の方の避難所の要望でネギとろ丼を提供したこともありましたが、仕出し屋さんにお願いし避難所の規模に応じて材料を用意頂き保冷車をお借りして衛生面に気を使い提供しました。掛かる費用は多くなったかもしれませんが、仕出し屋さんからもぜひ活動に協力したいと申し出がありましたので、共にボランティアをするということを学びながら出来たのではと思っております。

天野：福島では全曹青の本部もあり、また県内が6つの支部に分かれそれぞれが独立性をもつ中、県の青年会としてはどう活動されましたか。

瀧澤：やはり原発事故の影響が大きく、浜通りの御寺院様は動ける状況ではなかったため、県の青年会としては会津支部、中通り支部の会員が一丸となってま

※ 福島曹青　炊き出し風景

ず始めに行ったのが浜通り地区での炊き出しでした。豚汁やクリームシチューや時には果物を切って提供しました。落ち着いてきて仮設住宅に移ってからは焼鳥を提供した事もありましたが縁日みたいで大変好評でした。今でもその笑顔が忘れられません。

天野：青年会として会員に活動を呼びかける、参加してもらう事務局の苦労、難しさもあると思いますが、岩手ではガレキの撤去や支援物資の搬入は個人的な繋がりで呼びかけたのでしょうか。

恵津森：県曹青会で行うガレキ撤去のボランティアは事務局で参加者を募り、被災地のボランティアセンターに登録し活動しました。釜石や陸前高田へ行くには距離的に時間がかかるのでバスを葬儀社に手配し乗り合わせていきました。

天野：ボランティアセンターを通す様になったのは教区の事情でしょうか。

恵津森：当初は自分たちでガレキ撤去の活動しておりましたが、センターを通してする様にと社会福祉協議会から指導がありました。

天野：宮城ではガレキ撤去活動は御寺院様から依頼があったところに入ったのでしょうか。

門脇：事務局で被災された御寺院様の情報を把握し、青年会からお声掛けし依頼があった御寺院様のところで撤去活動を致しました。作業するのを寺院に限定したのは、（地域のコミュニティである）そのお寺が早く復興すればその地域のお檀家様も集まる事ができ、安心を得ることが出来ると考えたからです。

天野：岩手では四月十一日に初めて慰霊法要をされたとの事ですが、それまでは撤去作業など体を使って行う活動から僧侶だから出来る活動にシフトしていったと思います。それは特別な思いがあったのでしょうか。

恵津森：ガレキ撤去作業をしながらも私たちにしか出来ない事があるのではないかと考えた時、やっぱり「供養」という事に行き着きました。月命日法要を行い、これはこれからもずっと供養を続けて行かなければならないという思いになっていきました。

天野：福島ではそういった慰霊法要、慰霊行脚など供養についてはどうでしたか。

光英：震災から一年の時いわきの海の近くにあるお寺様で慰霊法要と復興祈祷法要を行いました。二年目三年目の時は全曹青とタイアップして法要を行いました。

天野：宮城に戻りますが「僧侶にしか出来ない活動」というのは、青年会として慰霊行脚や一周忌、三回忌法要に繋がって行くと思いますが「僧侶にしか出来ない活動」にこだわった理由はありますか。

奥野：月命日法要に合わせて行茶活動をして被災者の方とお話をする機会を設けたくて行いました。二年目からは慰霊行脚ということで被災地を実際に歩いて供養をしました。それも全曹青とタイアップという形で広くお声掛け頂き、実際に被災地を歩いて供養したいという全国の青年会からたくさんの御随喜を頂く事ができました。慰霊行脚を始めたきっかけは沿岸部では亡くなった方が多く、夜道路を通るのが怖いといった声が実際多くありました。その道路を大勢の和尚が歩いて供養する事で地元の人の心、気持ちが少しでも楽になればという思いで始めたのも理由の一つです。

※左から　門脇師、奥野師、天野会長

天野：ありがとうございました。ここまで青年会の活動に関して伺って参りましたが、ちょっと視点を変えます。色々な団体、個人から支援金を頂いたと思いますがどのように活用しましたか。

恵津森：私たち（岩手曹青）は支援物資ではなくボランティア活動に掛かる経費に充てさせて頂きました。

天野：宮城では全国からたくさんの支援金を頂きましたよね。

奥野：そうですね。新たに復興支援活動金という会計枠を設け、頂いたお金はすべてそこに入金し支援活動にかかる費用に自由に充てさせて頂きました。炊き出しをするにも移動するにもすべて費用がかかりますので被災者に還元するという意味で会計枠を設けまして現在も活用させて頂いております。

天野：福島ではどうですか。

光英：（全国から支援金を）同じく頂いておりますが、この度ボランティア基金枠を次年度から設ける予定で規約を整備している段階です。

天野：その時の執行部が支援金を使用されたのですね。

瀧澤：そうですね。実際炊き出しの材料費や経費がかかりますし、多少ですが参加した会員の交通費に充てました。それでもまだ余剰金があるのでそれをボランティア基金にしたい思いです。

天野：そうですか。その他にお聞きしたいのは当時の個人的な繋がりでの支援というのは如何でしたか。石ケ森師は実際同安居の方に支援を頂いたようですが。

石ケ森：そうですね。愛知曹青の有志の方たちが七～八人で来て頂いて、幼稚園に着ぐるみを着て訪問してくれて三輪車やおもちゃをプレゼントして子供たちと遊んだりと定期的に来て頂いてます。また総合研究センターの同安居も定期的に岩手に来て仮設の集会所で紙芝居やビーズで小物作りをして頂いてます。

天野：そうでしたか。次はもっと掘り下げて他団体から支援をうける側として難しかったこと、あるいは違和感を覚える様な事はありましたでしょうか。岩手ではありましたでしょうか。

恵津森：「（他団体から）次はいつ活動す

るの？次何をするの」という様な問い合わせがあったのは事実です。被災地に心を寄せて支援頂けることは非常にありがたいことですが、被災地の青年会としてはどう活動しようかと思案中のところだったので、活動を煽られる様なことはありました。

天野：（被災地の曹青会として）焦りがありましたよね。宮城ではどうでしたか。

門脇：あるところから支援物資提供のお話があって、こちらとしては必要の無いものでしたのでお断りしたらお叱りを受ける事もありました。時間の経過とともに現地の状況が変わるので、それを分かって支援提供をしてもらえればと思う事はありました。今までは災害があると現地に行くことが大事だと思ってましたが、今度我々が支援する側になった時は今回経験したこと、感じた事に気を付けなければと思います。

奥野：ボランティアは自己完結でするべきと感じました。今後自分たちが支援する時は自分たちの寝るところ食べる物を確保し現地の迷惑にならないようにしなければと感じました。もちろん全国からたくさんの方が足を運んで支援して頂いた事には感謝してもしきれないほどの思いがあります。他のところで災害があったとき行政などから情報を得て、支援する時期など考慮し青年会としてどの様な支援が出来るか考えていかなければと思います。

天野：福島ではどうでしょうか。特に伊達市を中心に全国からボランティアに入って頂いたと思いますが、地元の青年会として焦りはありましたでしょうか。

瀧澤：全曹青を始め他県の青年会の皆さんに定期的に福島に支援に来て頂いて、逆に心苦しく申し訳なく感じる数年間で、それと同等の活動を福島曹青会として出来ていたのかと疑問に思うことがありました。ともあれ福島に思いを寄せてくれる事は本当にありがたく、震災直後に長野の方が来てくれて、被災地で今何が必要か想像してガソリンを提供してくれました。それが本当にありがたく、被災地のその時の状況を想像して支援するイメージ力が大切だと感じました。

天野：今すごくいい提言がありました。ボランティアには想像力が大事であり、それがなければ効果的な支援はなし得ないのではと思います。被災者でもあるが、地元の僧侶だから何かしなければならないという焦りがストレスになったのではないでしょうか。今後自分たちが活動するときは想像力を働かして行うというのが大切ですね。それでは次に将来の事をお聞きします。どの県に於きましても今後更に重大な災害が起こりうるという見解のもと、具体的かつ実行力のある準備をされてることと存じますが岩手ではいかがでしょうか。

恵津森：以前から災害時に曹青会として対応できることを示した防災マニュアルを作成したいという意向があり、震災の一年前に完成し各地区の社協に配布しました。ただそれは完璧なものではなく内容について会員で知っている者はほとんどいない状況です。むしろマニュアルの存在自体、知っている会員は半数もいないのではないでしょうか。せっかく作成してもそのような状況で震災が起こり慌ててしまったので、せっかく作成したそのマニュアルを活かせるような体制を作っていかなければならないし、ボランティアの我々の対応の仕方を専門の方から指導、研修を受けていきたいと思っております。

※左から　瀧澤師、光英師

天野：ありがとうございます。ここでまたお伺いしますがたとえば他の所で災害があった場合は岩手ではどのような体制で動きますか。

恵津森：この間、兵庫で災害がありましたがその際は執行部が集まり意見を出し合って、岩手曹青として執行部は同じ方向を向いて活動をしようとしました。今後も有事の際は執行部が集まり協議し対応行動していきたいと思います。

天野：次は宮城の奥野師にお聞きしたいのですが、会として動く時にこうあって欲しいということがあればお聞かせ下さい。

奥野：まず災害の規模に応じて判断し活動しなければならないと思います。状況によっては自分達が被災地に行くことで逆に迷惑をかけることもあろうかと思います。宮曹青ではボランティア基金がありまして、以前から災害があったところにはまず支援金を送ることにしております。その後、実際に活動するかどうかの判断が大事かと思いますが協議していると対応が遅れる場合もあるので、ある程度は会長判断で動けるような体制をとってもよいかと思います。和尚たる者、困っている人がいれば何かしら行動することが大事だと思います。その時には現会長の天野師が作成している災害ガイドラインが必要になってきますのでたくさんの方の意見を聞きながら是非作成して頂きたいです。

天野：福島ではどのような準備をされておりますか。

光英：宮城さんがボランティア基金を設けているという事を会報誌の「無聖」を拝見させて頂いて知っていたので福島でもボランティア基金を設置しました。ガイドラインの事も先ほどお話されていて福島でも取入れたいと思いました。炊き出しで使用した道具など支援で頂いたものがたくさんありますので、それを保管、管理するレンタル倉庫を郡山の中心に借りております。

天野：福島では宗務庁の分室がありますが共同で何か活動されてるのでしょうか。

光英：分室から依頼がありまして、浪江町などから福島市に避難された方々に対して年に何度か健康保険センターに集まって頂いて写佛や法話をした後、行茶活動を行っております。

天野：ありがとうございます。先ほど岩

手の恵津森師からありました兵庫での災害活動に際しては東北地協が東北六県と全曹青のパイプ役として支援の内容など具体的に提示して頂いた事が大きいと思うのですが、これからの宗門、全曹青、宗務所に期待することがあればお話下さい。

恵津森：（岩手県に）宗門のボランティアセンターがあったのですが、出向された職員の方はご自身で活動されて大変だったと思います。私としてはその方が動くのではなくて我々にボランティア活動を振り分ける、繋ぐパイプ役となって頂ければもっと活動の幅が広がったのではという思いはあります。（宗門全体のボランティア）組織を作って行く中でそうあって欲しかったという思いはあります。

天野：たとえば全曹青に対してはどうですか。

石ケ森：すごい活動をされてると感じました。久間師と当時の岩曹青会長が同安居ということもありうまく連携して活動出来たと思います。全曹青とは各曹青会が繋がりを再確認し情報をシェアしてければと感じました。メーリングリストのお陰で岩手も支援を受けることができましたので、今後、全曹青には更にアクセスしやすいネットの力を活かした情報の共有の形を構築、提示して頂ければと思います。

門脇：私も同意見で、うまくネットワークを使って活動できればと思います。それぞれの団体で役割があると思います。必ずしも被災地へ行って活動しなければというのではなく、動かずに経済面で支援することもあるでしょうし、それをうまく融合させて大きな支援になればよいのではないでしょうか。また地協でもガイドラインのようなものを作成して頂いて役割分担をある程度取りきめておけば動きやすくなるし、素早い情報交換もできると思います。それぞれの役割を全うできるよう青年会同士でネットワーク組織作りをして頂いて、そして、それをご寺院様方にもご理解頂けるよう本庁や宗務所から発信して頂くと我々も活動しやすくなると思います。

奥野：本庁で組織を縦割りで一本化して作ってしまえば早いのかもしれませんが、逆にしがらみがなく動きやすいのが青年会なのかなと思います。脇目も振らず活動をしてしまうと意見が出るところではありますが、一番大事なのは活動の目線をどこに置くかということです。目線を被災者に合わせて、一緒に寄り添うような支援、青年会しか出来ない活動を行えればよいのではと思います。縦割りや事細かなマニュアルを作成してしまうと逆に動きづらくなる原因にもなり兼ねないので、臨機に対応できるような組織作りが大事かと思います。

光英：一言で言えば「繋がり」を平常時から大切にしなければと思いました。それは青年会、教区、地域、社協にしても我々僧侶は色々なところに繋がりを持たないといけないと今回の震災、ボランティアを通して気付かされたのでは。所詮一人では何もできないと震災の時に思ったのではないでしょうか。宗門に臨むことですが宗門のHPに「水害時の際のマニュアル」が公開されていて今後、災害時のマニュアルも公開されるということでありがたく感じております。災害があった時にマニュアル通りに進むとは思っておりませんが、ある程度の方向性が出来ればと思っておりました。

瀧澤：今、懸念されている関東大震災、東南海地震がもし起こったらどうなるのか。首都圏の何千万という人がもし福島や宮城、岩手に流入してきたらお寺は避難所として提供出来るのか、その際のノウハウや準備物など想像の域ですが、宗門で指示して頂けると有難いと思います。

天野：今後、予想される災害に対して想像力を働かして常に準備を怠らないところが震災を経て学習した大事なことだと思います。本日は長時間に渡り貴重な経験談をお話し頂き誠にありがとうございました。

《最後に質問者として》

震災からおよそ四年が経過し、震災時の支援活動などについての総括は様々な場で語られ、すでに一定の問題提起がなされています。例えば今回の経験をもとにした対策マニュアルの作成と周知の必要性、そして情報の収集と共有が緊急災害時の最重要事項であることなど…。もちろんこれらの重要性は十二分に理解出来ますが、本当に大事なのは災害発生時になぜこれらの事項が重要になるのかという事を、自らの経験と結びつけて考え理解することだと思います。

今回座談会にお呼びした被災三県の代表者は、震災直後から宗門の僧侶として自らを省みず支援活動に汗を流し、自身も苦悩しつつ被災された人々とともに歩んできました。

その体験から語られる言葉がたとえこれまで耳にしたことであっても、当時の状況を記憶の底にしまうことなく常に視界の中に置くことが、将来何かが起こってしまった場合、最善の方法を取ることが出来る最良の備えだと思います。

震災直後の混乱とその後の支援活動、その時に目にした光景、語られた言葉、私たちはこれからも何度も何度もこれらを語りついでいきます。それこそが私たちの使命であり、未来への責任であると考えるからです。何年か後、何十年か後、この『無聖』を手にとった未来の青年僧侶が自信をもってそれぞれの活動へ飛び込んでいけるように…。

宮曹青　第二十三期　会長　天野　大真

宮曹青主管　カンボジア教育支援活動

サンタピアップみやぎ ボランティア会

「オリジナル卓上カレンダー2015」完売

当初二,〇〇〇部の作製を予定していたカレンダーですが、多くの方々よりご注文を頂きましたおかげでさらに作製部数を追加、無事完売となりました。こちらの収益も教育支援費として大切に活用させて頂きます。

製作販売数
2,740部（一部300円）
売上合計　822,000円

「カンボジアフェア in SELVA」開催報告

●日時：平成二十六年十二月十日～十二日
●会場：仙台市泉区中央「SELVA」二階
●来場者：約二〇〇名（三日間延べ）
●スタッフ：四十九名（三日間延べ）

ご来場の方には、ホシヤマ珈琲店様提供の美味しい珈琲を飲みながら、小学校贈呈式の様子などの映像もご覧いただきました。

クラフト販売	売上合計	112,870円
募　　金	募金合計	47,715円
古本・CDなど	沢山	

各イベント等での活動（サンタピアップブース設置）

各会場にて活動紹介・カンボジアパネル展示・クラフト販売・募金活動などをさせて頂きました。

「法山寺幼稚園夏祭り」
平成二十六年八月二十三日　於 石巻市法山寺幼稚園

「宮城県梅花流奉詠大会」
平成二十六年九月十二日　於 仙台市体育館

「曹洞宗青年会東北地方集会 秋田大会」
平成二十六年十月二十九～三十日
於 秋田キャッスルホテル

「禅をきく会」
平成二十六年十二月四日
於 楽楽ホール

「もったいない」そのこころが、子供たちの明るい未来につながる
「ハガキリサイクルキャンペーン」中間報告

この一年間で皆様に収集頂いた書き損じハガキと切手の集計作業を行いました。全国の御支援者様より沢山のご提供を頂き誠に有難うございます。

●日時：平成二十七年二月二十五～二十六日
●会場：サンタピアップ事務局
●集計作業：参加三十六名（二日間延べ）

皆様からお寄せ頂いた書き損じハガキや切手は、新しいハガキや切手に変えて県内御寺院様や団体企業様にご購入頂き、その売り上げをカンボジア教育支援費として活用させて頂いております。

「集計結果」

書き損じはがき	合計15,568枚
切　　手	合計 8,485枚 （額面換算 計454,524円）
古本・CDなど	沢山
寄付金	合計22,795円

『古本・CDリサイクル』による支援

皆様のご家庭に、不要になった漫画や文庫本・CD・DVD・ゲームソフト等はございませんか？あの頃、大切にしたこの本をもう一度役立たせたい…是非とも私たちにお譲り下さい!!
詳細はホームページ、又は事務局までご連絡下さい。

一枚のハガキや切手が支えます

■書き損じハガキの送り先
〒九八六-〇一九九　石巻市相野谷字五味前二番七－一
河北郵便局留「サンタピアップ」宛

■支援金の送り先
郵便振替口座
名義　サンタピアップみやぎボランティア会
口座番号　02290－6－48744

■サンタピアップ事務局
〒九八六-〇三〇三
石巻市桃生町永井字仁田森二三　浄音寺内
TEL/FAX　0225-79-3003（専用）
E-mail：info@santapi.com

「瑞川寺様」SVAより表彰

カンボジア教育支援活動に対し、長年に亘り多大なるご支援をいただいている瑞川寺様（第九教区）へ、（公社）SVAシャンティ国際ボランティア会より感謝状が贈られました。

サンタピアップでは、毎年一万枚のハガキをご購入頂いており心より感謝申し上げます。

書き損じハガキ・切手・古本・CD・DVD・ゲームソフトをご提供下さい！
1枚から年中受付けております。ホームページもご覧ください!!
サンタピアップ　検索
http://www.santapi.com/

平成27年度ソフトボール大会開催のお知らせ

日時：平成27年5月28日（木）
午前9時開会式
午前10時試合開始
場所：富谷町
総合運動公園グラウンド
たくさんのご参加を
お待ちしております！

第三十九回曹洞宗青年会東北地方集会「秋田大会」報告

平成二十六年十月二十九日（水）、秋田キャッスルホテルにおいて第三十九回曹洞宗青年会東北地方集会・秋田大会『日本人の心』が開催されました。内容は以下の通りです。

第一部　歎仏声明と詠讃歌による
「東日本大震災　追悼と復興への祈り」
第二部　講演　講師：竹田恒泰 氏
演題：「古事記と日本人の心」

当日は、東北各県の曹青会員と、一般の方合わせて約一，一〇〇名が来場されました。なお、当会からは十一名が参加して参りました。

事務局だより

平成二十六年度　年次総会

平成二十六年十二月十七日（水）秋保温泉ホテルニュー水戸屋を会場に「平成二十六年度　年次総会」が開催されました。（出席者四十三名）

議長に第七教区法幢院　高橋説山師が選任され審議事項として先般の理事会にて承認された「第二十四期三役人事案」について、第二十四期会長として第十三教区法山寺　北村暁秀師を天野会長より上程、審議の結果、満場一致にて北村師が選任されました。

その後、北村師が副会長三名・監事三名の人事案を読み上げ、上程審議の結果満場一致にて承認されました。

また天野会長が東北地協連絡協議会に、そして神作紹道師が全国曹洞宗青年会に引き続き出向されることが満場一致で承認されました。

お二人の活躍によって宮曹青としても他の協力団体との関係が更に強固になるよう期待されます。

会長
・第13教区　法山寺　北村　暁秀

副会長
・第4教区　慶雲院　清水　大伸
・第11教区　耕徳寺　長谷川俊昭
・第12教区　建立寺　坂本　顕一

監事
・第3教区　鳳壽寺　鈴木　俊龍
・第11教区　潤洞院　二階堂法淳
・第21教区　東泉寺　眞山　隆宏

第24期三役の面々

今後の予定

4月24日（金）…平成27年度総会・合同委員会
於　ホテルニュー水戸屋
5月11日（月）…全曹青　中央研修会
於　曹洞宗檀信徒会館
5月12日（火）…全曹青　定期総会
於　曹洞宗檀信徒会館
5月28日（木）…ソフトボール大会
於　富谷町総合運動公園グラウンド

編集後記

二年間広報編集、ホームページ運営に携わり、慣れない分野で色々と勉強させて頂きました。特にホームページ運営に関しては知識もなくほぼゼロからのスタートではありましたが、副委員長の菅原純孝師の協力を得ながら、二人試行錯誤で運営して参りました。無聖に関しても広報編集委員に協力を頂き、何とか発行することができましたが、毎号の如く発行が遅くなったのは私の不徳の致すところであります。しかしながらも今期を通して無聖、ホームページという形を作り、会の記録を残すことができたことは委員長として感慨深いものです。携わって頂いた皆様に感謝し、そして、これからもこの形が更に広がっていくことを願い、編集後記と致します。

（広報編集委員長　清水大伸）

表紙写真
台湾 東和禅寺
拝登 諷経

無聖 第70号（平成27年4月15日発行）

表紙題字　宗務所長 小野﨑秀通 老師
編　　集　宮城県曹洞宗青年会
発 行 人　天野大真
事 務 局　仙台市太白区門前町8-22
福聚院内
TEL・FAX　022-308-0043（専用）
U R L　http://www.miya-sousei.com
e-mail　info@miya-sousei.com

R70 古紙配合率70%再生紙を使用しています。
PRINTED WITH SOY INK 環境に優しい大豆油インキを使用しています
ホームページはこちら　宮曹青　検索